障害児教育における基礎・基本の定着と個に応じた指導のあり方

— 選択授業の導入と実践を通して —

荒森紀行・奥野正二・泉本聖子
石津　充・船津守久*・小林秀之**

Development of Basic Ability and Instruction Suitable for Each Student in Special Education

-Based on Intoroduction and Practice of Optional Subject-

Noriyuki ARAMORI, Masatsugu OKUNO, Seiko IZUMOTO,
Mitsuru ISHIZU, Morihisa FUNATSU, and Hideyuki KOBAYASHI

Abstract. We introduced optional subject into the curriculum of special class at the current year. Consequently, instruction which was more suitable for all the students' actual condition was able to be carried out, and all the students have learned very enthusiastically. Three points were suggested as a result. First, clarify a problem of each student by three people (the student, the guardian, and the teacher) at early time of the year. Secondarily, make an appropriate class according to the clarified problem. Thirdly, make the student choose the subject by various viewpoints. The follwing year, we are also going to improve optional subject and to aim at fixing of the basis to each students.

Key words : optional subject,curriculum of special class

Ⅰ．はじめに

広島大学附属東雲中学校の障害児学級においては，ここ近年，生徒の実態に応じたカリキュラムや指導形態の根本的な見直しの必要性がより強く感じられ始めた。また，通常の学級での選択教科の拡大とともに，本学級でも「教科」「生活単元学習」「総合的な学習の時間」相互の関連と位置づけを明確化することが必要となった。そして本学級において育てたい生徒像は何か，基礎・基本をすべての生徒に十分身につけさせるためにはどう指導するか，学習内容・学習形態はどうあるべきかを実践の中で探ってきた。(荒森ら，2001)

その中で，指導内容として新たに取り組んだこと（「総合的な学習の時間」「体力づくり」「リテラシー」）があり，また指導体制として取り組んだこと（各教科等の週時数の見直し，グループ編成の弾力化，T.Tの拡大など）など，より綿密に生徒個々の課題に対応する手だてをもつことができた。

しかし，より具体的に生徒個々に対応するカリキュラムのあり方として「選択教科」そのものへの取

＊　広島大学大学院教育学研究科教授
＊＊広島大学大学院教育学研究科助教授

り組みは本学級ではなされておらず，この点は未検討のままであった。

本研究は平成14年度の本学級において，実践途中ではあるが特に選択授業の取り組みを中心とする整理と考察を行うものである。

Ⅱ．学級の実態

本学級は知的障害を有する生徒を対象とした障害児学級で，各学年８名ずつ（第１学年男子４名・女子４名，第２学年男子７名・女子１名，第３学年男子６名・女子２名），計24名が在籍している。

生徒の障害の実態は，概ね中等度の知的障害であり，自閉的傾向を示す生徒を数名含んでいる。

生徒の通学範囲は学校所在地を中心とした広島市及びその周辺地域である。徒歩または公共交通機関利用による自力通学の生徒が大半である。

授業は「総合的な学習の時間」を通常の学級と合同で実施する以外はほぼすべて本学級独自に行っており，教科学習においていわゆる交流授業は実施していない。指導には，学級担任４名に加え，２名の専科教諭，８名の非常勤講師等があたっている。

Ⅲ．教育目標・カリキュラム

本学級では，様々な生徒の発達課題に応じて，生徒の社会的自立を目指し，より豊かでたくましい生活力に育成を目標に教育を行っている。より豊かでたくましい生活力をもった生徒とは，「のびのびした明るい子（情緒の安定）」「げんきな子（体力づくり）」「すすんでする子（自主的態度の育成）」「自分でできる子（社会的態度の育成）」「よく見，よく聞き，よく考える子（科学的態度の育成）」であると考える。

また，そのための基礎・基本として，たくましく生きるための健康や体力を基盤とし，基礎的な知識（知的な側面），技能（能力的な側面），表現（態度的な側面）の３つの力が必要であると考えている。これらの知識，技能，表現の３つの力はそれぞれ独立したものではなく，常に相互に関連し，絡み合いながら伸びていくことで，社会の中で生きていくためのより豊かな生活力の獲得につながっていくものであると考える。　具体的には以下のように各教科・領域をとらえ教育課程の編成を行っている（図１）。

知的側面（国語，数学，リテラシー，生活）

能力的側面（作業学習，選択授業，学級活動）

表現・態度的側面（芸術，体育，コミュニケーション・英語）

総合的な内容（生活単元学習，総合的な学習の時間，三組活動）

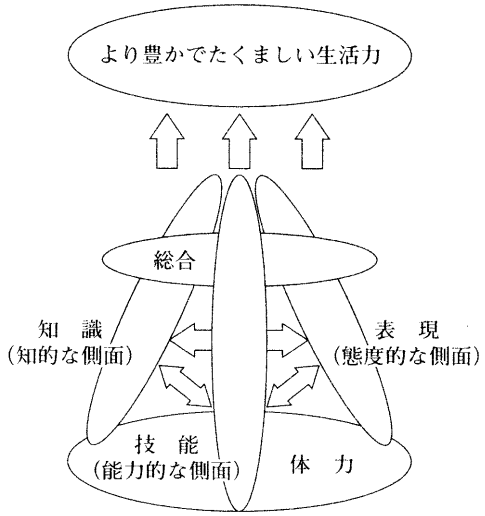


図１　基礎・基本の構造図

指導にあたっては，多様な集団で活動することができるよう規模・構成の異なる５つの学習形態をつくり，生徒個々の実態に応じた指導を行っている。

本学級のカリキュラムはこれまで各教科の時間を保障しながら領域・教科を合わせた生活単元学習や作業学習もとりいれた構成を継続してきた。平成14年度に実施したカリキュラムを表１に示す。

表１　平成14年度の週授業時数

教科等	生活単元学習	国語	数学	リテラシー	体力づくり	生活	芸術 音楽 美術	体育	作業 家庭 粘土 木工 農芸	コミュニケーション・英語	三組活動	学級活動	総合的な時間の学習	選択	合計
時数	4	2	2	2	2	1	3	2	2	1	1	2	2	2	28

生徒個々への指導を充実させ，より綿密に個別の学習課題を満たすことをねらいとして，以下の６つの変更をおこなった。

①完全週５日制移行のため週総時間30時間を28時間に減じたこと

②「社会」「理科」を合わせた内容を「生活」として２時間を１時間に変更したこと

③「音楽」「美術」計４時間を３時間に変更したこと

④「作業学習」４時間を２時間に変更したこと

⑤一部生徒のみ実施していた「英語」を「コミュニケーション・英語」として全員に実施したこと

⑥新たに「選択授業」２時間を設けたこと

また，指導形態として「国語」「作業学習」の一部に新たにT.Tをとりいれ実施した。また「生活」「体育」ではT.Tを増員した。「英語」では，指導者一人であったが「コミュニケーション・英語」ではT.Tとし，さらに，月に一度ではあるが外国人教師も指導に加わるようにした。

Ⅳ．本学級における選択授業

１　選択授業導入の背景

本学級では，先に述べたように基礎・基本の定着と個に応じた指導をという観点から，できる限り24名の生徒一人ひとりの興味・関心を生かし，一人ひとりがその力量を発揮し伸ばしていくことができるようにとの考えに基づいて，各教科及び，作業学習や生活単元学習のような領域・教科を合わせた指導の内容を，それぞれの内容・目的に適した様々な学習形態により指導してきた。生徒の実態をもとにこれまでの指導を振り返った結果，次の二点の課題があった。第一に，一人ひとりの力量に対してより適した内容・方法で指導するため，より小さな学習グループを編成するという点。第二に，現在までのカリキュラムや指導体制では保障することが難しかった生徒個々の得意分野や興味・関心の強い分野の学習機会を保障するという点。

また，本学級で生徒が行う学習活動の中には，すでに様々な形で自己決定の場が設定されているが，通常の学級で行われている「選択教科」のように，自分の学習する内容を自分で選択し決定するとい

う機会はこれまでなく，新たな自己決定の場としての可能性を検討したいと考えた。

これらの理由から，生徒が自分の興味・関心をもとに，自ら選択することで，意欲的に学習できる選択授業を導入することとした。

2　選択授業の目的

選択授業は次のような目的を担っている。

①より少人数のグループ編成を行い，生徒の力量に応じた指導を行う。（補充及び深化・拡大）

②得意な分野・不得意な分野を含め，これまで授業として行っていなかった分野の学習機会を保障する。

③選択にあたって，情報を整理し，比較検討し決定させることを通して，自己決定力を育成する。

④生徒に自ら学習内容を選択させることで，主体的に学習する態度を育てる。

3　実施までの経過

(1)　開設する各選択授業の人数

開設する選択授業の構成人数については，個々の生徒の実態に応じたより細かな指導・支援を行っていくために，できる限り少人数が望ましいと考えた。担当できる指導者が７名という限られた人数であったため，どの選択授業も指導者１名に対して，生徒数を２名から４名に設定することにした。

(2)　生徒の実態に応じた選択授業の設定

開設する選択授業については，生徒の実態から考え，個々の生徒がすすんで選択すると思われるものと，指導する側が生徒の課題として考え選択させたいものとの両者を含めた。また，教科的な内容（社会，歴史，数学，音楽，体育）から，より日常生活に直結する内容（料理，乗り物，園芸，工作）まで，できるだけ幅広い選択肢の中から選択し，主体的に学習していけるよう表２の18種類を設定した。

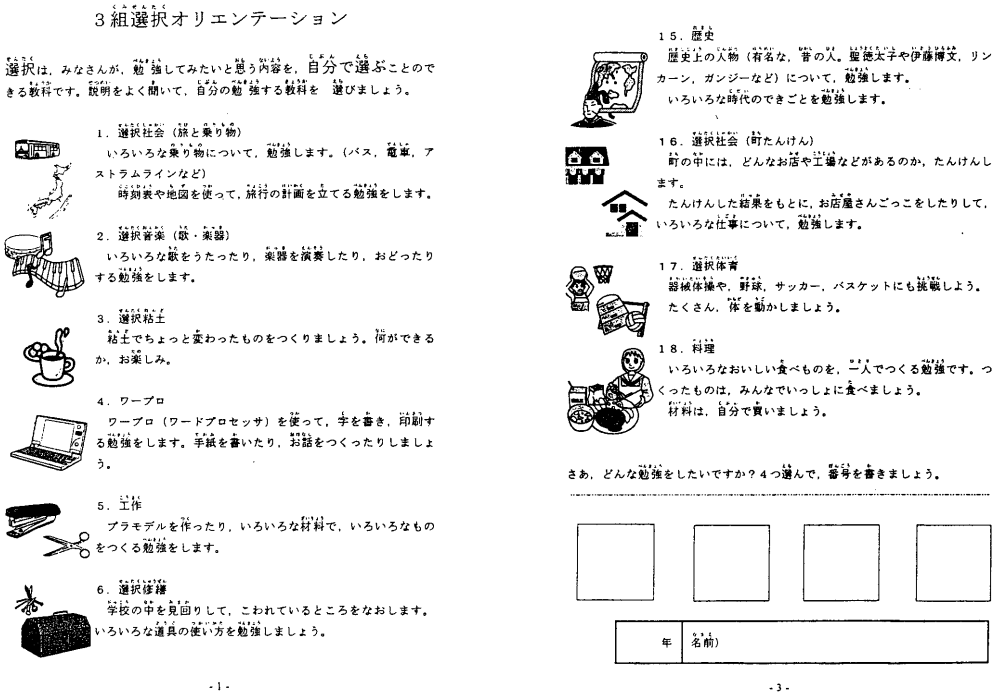
表２　設定した選択授業

１．選択社会（旅と乗り物）	８．写真	15．歴史
２．選択音楽	９．洗車	16．選択社会（町探検）
３．選択粘土	10．茶道	17．選択体育
４．ワープロ	11．おはなし・演劇	18．料理
５．工作	12．選択農芸	19．自転車
６．修繕	13．裁縫	20．生き物
７．選択数学	14．選択家庭	21．選択美術

＊19～21は，後期に新たに加えたもの

(3) オリエンテーション

言葉だけで概ね理解できる生徒から具体物を用いて実際に行うことで理解できる生徒までと幅広い生徒実態に合わせ，具体的にどのような活動なのかを示した説明文と活動の内容を示した挿絵を入れるなどの工夫をしたオリエンテーション資料を配付し，説明した（図２）。また，各授業に１から18の通し番号をつけ，１から順番に言葉での説明，具体物を提示しての説明，具体的な操作を行っての説明を行うことで，どの生徒にも活動内容がよりわかりやすくなるようにした。


３組選択オリエンテーション

選択は，みなさんが，勉強してみたいと思う内容を，自分で選ぶことのできる教科です。説明をよく聞いて，自分の勉強する教科を　選びましょう。

1．選択社会（旅と乗り物）
いろいろな乗り物について，勉強します。（バス，電車，アストラムラインなど）
時刻表や地図を使って，旅行の計画を立てる勉強をします。

2．選択音楽（歌・楽器）
いろいろな歌をうたったり，楽器を演奏したり，おどったりする勉強をします。

3．選択粘土
粘土でちょっと変わったものをつくりましょう。何ができるか，お楽しみ。

4．ワープロ
ワープロ（ワードプロセッサ）を使って，字を書き，印刷する勉強をします。手紙を書いたり，お話をつくったりしましょう。

5．工作
プラモデルを作ったり，いろいろな材料で，いろいろなものをつくる勉強をします。

6．選択修繕
学校の中を見回りして，こわれているところをなおします。
いろいろな道具の使い方を勉強しましょう。

-1-

15．歴史
歴史上の人物（有名な，昔の人。聖徳太子や伊藤博文，リンカーン，ガンジーなど）について，勉強します。
いろいろな時代のできごとを勉強します。

16．選択社会（町たんけん）
町の中には，どんなお店や工場などがあるのか，たんけんします。
たんけんした結果をもとに，お店屋さんごっこをしたりして，いろいろな仕事について，勉強します。

17．選択体育
器械体操や，野球，サッカー，バスケットにも挑戦しよう。
たくさん，体を動かしましょう。

18．料理
いろいろなおいしい食べものを，一人でつくる勉強です。つくったものは，みんなでいっしょに食べましょう。
材料は，自分で買いましょう。

さあ，どんな勉強をしたいですか？４つ選んで，番号を書きましょう。

年　名前）

-3-

図２　オリエンテーション資料の一部

(4) 生徒の選択と授業の決定

すべての授業のオリエンテーションが終了したあと，配布資料の末尾につけられた選択希望調査に一人４つの希望授業の番号を記入させ提出させた（図２参照）。記入時においては，７名の指導者が机間指導を行い授業の活動内容の理解が十分ではない生徒，記入方法の理解が十分ではない生徒への支援を適宜行い，すべての生徒に４つの選択肢を記入させた。提出された希望調査の内容は，事前に予測していたように概ねそれぞれの生徒の興味・関心にそったものであり，自ら選択し主体的に授業に参加していこうとする姿勢が伺われた。

前期の授業の決定にあたっては，生徒の希望を優先しつつ，生徒の力量と各授業のねらいを考慮して調整し，３名から４名の生徒の履修する７つの授業を決定した。また，後期の授業の決定にあたっては，生徒の希望をとるところまでは前期と同じ過程を行い，希望を優先としながらも，できるだけ前期と同じ授業を履修する生徒がでないよう調整を行った。前期・後期に開設した授業名と履修人数は表３のとおりである。

表３　開設した授業と履修人数

前期開設授業名	履修人数
選択音楽	４名
選択体育	４名
歴史	３名
選択農芸	３名
おはなし・演劇	３名
旅と乗り物	３名
料理	４名

後期開設授業名	履修人数
選択音楽	４名
選択数学	３名
茶道	４名
料理	３名
工作	３名
選択粘土	３名
写真	４名

Ⅴ．選択授業の実際

１　各授業のねらい

(1)　選択音楽：友だちと一緒に歌ったり演奏したりすることを通して，音楽の楽しさを味わい，仲間と共に音楽を楽しむ態度を育てる（前期）。楽器の演奏に必要な基礎的な知識・技能を修得し，簡単な曲を自分でまたは仲間と演奏して楽しむことができる（後期）。

(2)　選択体育：いろいろなスポーツに挑戦し，身体を動かす楽しみを学習する。得意なことや好きなことを見つけることができ，積極的に取り組むことができる。

(3)　歴史：歴史上の出来事や人物について調べることを通して，歴史に対する関心を深め，自分なりにまとめ，表現できる。

(4)　選択農芸：季節の草や花に興味をもち，土に親しむことで，将来の余暇の活動につなげることができる。

(5)　おはなし・演劇：読み聞かせや劇の鑑賞，エプロンシアターやペープサート劇づくり，実演など様々なおはなしに触れることで，想像力，表現力を豊かに養い，おはなしの世界を楽しむことができる。

(6)　旅と乗り物：図鑑やビデオによる情報収集を通して，興味のある乗り物や時刻表，旅行経路や日本各地の風土に関する知識を深める。

(7)　料理：一人で簡単にできる献立を調理することで，自宅ですすんで料理をしようとする態度を養う。また，基本的な調理の技能を養う。

(8)　選択数学：簡単な一次方程式の解法や数的な要素を含んだパズルを行うことで，物事を論理的に考える態度を養い，数学的活動の楽しさを知る。

(9)　茶道：もてなしの心と感謝の気持ちを大切にしながら，茶道のお点前と客としての行儀，作法やマナーを学ぶ。

(10)　工作：生徒が興味をもったペーパークラフトを中心に，図形の把握・細かな部品の切断・接合・組み立てという一連の工作活動を通して，目と手と思考を育てる。

(11)　選択粘土：紙粘土で自分の好きなものを自由に作ることで，集中して主体的にものづくりに取り

組む力を養う。

⑿ 写真：デジタルカメラを使って人や作品，建築物などを撮影することで，楽しみながら基本的な写真撮影の技能や表現力を養う。

2 具体的実践例

⑴ 選択音楽

選択音楽は，前後期とも開設し，１人の指導者が担当した。

前期履修した４名は，いずれも音楽に対する興味・関心はある程度もっているものの，技能的には初歩的な水準であった。したがって，基本的には音楽の時間の内容を補完・補充しつつ，好きな歌をたくさん聴いて歌える，楽しくリラックスできる時間となるような構成とした。毎時間の構成は，リクエストの時間（３種類のＣＤから聴きたい曲をリクエストし，全員で聴く。歌や踊りを適宜とりいれる。）と楽器の時間（主には音楽の時間に行っているハンドベルやトーンチャイムなどの楽器の練習。他にタンバリンなどの打楽器や木琴なども使用。）の二つに大きく分けて行った。その結果，24人で行う合奏では，自分の打音タイミングがうまくとれなかった生徒たちも，指揮のタイミングを逃さず打音することができるようになり，このメンバーでの合奏では音がとぎれることなく１曲を演奏することができるようになった。特に，２年生の１生徒は，指揮と打音の関係が理解できていなくて演奏に参加することがかなり難しかった状態から，指揮をよく見て，打音できるようになった。

後期履修した４名は，いずれも発語・発声に課題をもち，歌唱を中心とした学習を当初から行うことは難しい状態であった。また，うち３名は言語指示の理解がよく，集団参加や演奏技能についてもほぼ同等に行うことができたが，１名は集団参加が幾分難しく，より多くの支援を必要とした。したがって，前期とは異なり，個別の支援を前提としながら楽器を中心とした内容を多くし，全体としてはより高度な演奏にチャレンジさせるなど音楽の時間の内容を深化・拡大する方向で授業を構成した。楽器は音楽の時間に使用する楽器を中心に，鍵盤ハーモニカもとりいれ，楽譜の読み方も指導した。

⑵ 料理／選択数学

同一の指導者が同一の生徒を前期・後期で違った授業で担当した例が24名の生徒の中で２例あった。その中でここでは，前期選択料理，後期選択数学を選択した生徒について振り返る。その生徒は第１学年の男子生徒であり，物事にこだわりが強く，特に物事の是非については強いこだわりを見せる。また，周囲とのコミュニケーションをとることが難しい場面が多く見られる生徒である。日常の学校生活では，概ね自立しており，とりたてて支援を要する場面は多くは見られないが，周囲とのつながりをよりスムーズに行うことができるように関わっていくことが必要であった。

オリエンテーション後の希望調査で彼が希望した授業は，前期では選択料理，選択粘土，修繕，選択体育，後期では選択料理，洗車，生き物，自転車であった（生き物と自転車は，生徒の希望により後期の選択肢として入れた）。その中から，前期は選択料理，後期は選択数学に決定した。前期の決定の理由は，料理すること，食べることはともに彼にとっては大好きなことであり，より主体的に参加

できるとともに，その活動の中で同じ授業の生徒たちと円滑なコミュニケーションをとれるようにさせたいというという指導者側の意図であった。実際に，献立を決める，みんなで買い物に行く，協力して調理する，みんなで楽しく食べるという活動を行っていく中，小集団での活動であることもあり，徐々にではあるが，表情が豊かになり，集団での楽しい活動とすることができた。後期では，彼が選択した授業は，選択料理以外は開設されなかった。前後期同一の授業の履修はさけること，以前からの保護者との連携や，日常の学校生活での教官の実態把握から，言語的なものよりも数量的なもののほうがより意欲的に活動ができ，それをもとにコミュニケーションの円滑化，情緒の安定が図れると捉えていたため，選択数学担当でもあった学級担任が本人，保護者と話をし，選択数学を履修させることにした。実際の活動の中では，彼の得意分野であったこと，パズル的な要素を盛り込んだこともあり，主体的に楽しみながら活動することができた。また，同じ授業の生徒とも協力して考える場面を設定し活動させることで，自分一人が楽しむのではなく，うまくコミュニケーションをとるとともに，常に穏やかな表情を見せながらの活動となっていた。

本来，本人の希望で履修する授業を決定していくべきではあるが，この例のように保護者との連携をとり，より具体的に個々の生徒の課題を設定していくことで充実した時間とすることができた。

(3)　選択社会「旅と乗り物」

4月，「旅と乗り物」に関心をもった生徒4名（男子3名・女子1名）の集団でスタートしたこのグループでは，概ね鉄道に興味の中心が強いと見えたことから，ペーパークラフトによる新幹線の模型づくりから活動を始め，旅や乗り物に関係のあるビデオや図鑑を読む活動に変えていった。男子3名はこの活動内容に関心を示し，学習を進めることができたが，女子の生徒は次第に興味が続かなくなった。授業内容が本人の理解と異なっていたのではないかと考え，本人と相談した結果，他のグループへ移籍することになった。この結果6月以後は男子3名に指導者1名のグループになった。

男子3名はいずれも自閉的傾向をもつ生徒で，それぞれの趣味として，鉄道車両へ傾倒する生徒，日本地理に関心がある生徒，どちらにも特に強くは魅かれない生徒と三者三様であった。各々が微妙にその嗜好を異にし，また他者と交流したり考えを共有することが苦手であったため，共有できる素材について互いに交流できることと，興味の対象をより柔軟に広げさせることをこのグループでの重点に置いて活動を進めることとした。

生徒各自に自分の好きな乗り物か旅行の本を毎回1冊持参させ，そこに書かれている内容を整理し，自分がどこに興味があるのかを他の仲間に発表できるよう，ワークシートに毎回記入させ互いの興味を交換できるよう授業をくみたてた。また指導者も毎回，関連するような図鑑やビデオ類を複数用意して，互いに回し読みができる環境を設けた。さらに毎時間の終わりには，全員のワークシートを回覧して他の生徒がどの本（またはビデオ）のどこに興味を覚えたか・疑問点は何かなど，共通の書式で交換し，認識の相互理解を図った。

半年間の活動を振り返り，まず，他生徒との認識の共有や，個々の興味・関心の社会全般の事象への拡大といった，指導者の意図が成果として現れたとは言い難いことが課題として挙げられる。しか

し，毎回，各自自慢の書籍を持参し，教室でも熱心に読む姿から，個々の生徒の興味・関心を十分満たすことができたと考える。毎回ワークシートの項目に沿って記述することによって他の教科では継続が困難な分析的に資料を見る練習ができたこともあり，この半年間の活動は貴重な学習であったと考える。

(4) 茶道

茶道は後期より開設し，生徒４名（男子１名，女子３名）が履修した。この授業では体験的な学習をより多くとりいれることにより，生徒が主体的，意欲的に活動に参加し，「できた，やれた」という新しい自信や力をつけていくことを大切にしながら指導を行った。

茶道の授業は毎回，茶室づくりからスタートする。普段は教材準備室として使用している教室に畳を敷き掃除機をかける，扱いに注意しながら茶道具や必要な器具を準備する，花台に飾るお茶花を校内から採取してきて生ける，掛け物を飾る，お茶をこす，お菓子の用意をする等の一連の準備を当番制にして役割分担して行っている。徐々に普段の教室から茶室へと変わっていくにつれ，生徒たちの気持ちもこれからの活動に向け高まっていく。茶室づくりは時間がかかるため，指導者があらかじめ準備しておくことも考えたが，生徒に自分たちの活動としての意識を高めさせ，主体的に参加させるため，生徒とともに行った。２時間続きの授業のうち，１時間目のほとんどを使用してひととおりの準備が整ったらお茶のお点前の練習を行う。お点前も毎回練習を重ねるにつれ，手順を覚え，指導者の簡単な指示のみで行えるようになっていった。「うまくお茶が点てられるようになったら他のグループの仲間を招待してお茶会を開こう」という目標のもとに，皆真剣に取り組んだ。同時に礼儀や作法，マナー等も学習した。もてなしの心や客としての感謝の気持ちを大切にさせ，あいさつや道具の扱い，姿勢なども重視しながら指導を行った。お茶をもてなす側とお茶をいただく側に分かれて，それぞれ関わり合って活動を進めていくことで，互いに様子を見合ったり，声をかけ合ったりするなど生徒同士の関わりも多く見られた。

以上のように準備からお点前の練習，お客のマナーの学習，片づけまでの一連の流れを毎回くり返すことにより，生徒一人ひとりが見通しをもって取り組み，次第に自分たちの力で展開することも可能な部分が増え，その結果，成功感や満足感を味わうことができた。

また，茶室づくりという学習に必要な環境を整えていくことは，お茶を点てる前の心構えや緊張感をもたせる意味でも有効であったと考える。他の授業と違い畳の上で正座をして活動を行うことも生徒にとっては新鮮であり，慣れない正座に苦労しつつも，それぞれ意欲的に取り組むことができ，より効果的な学習となったと思われる。

Ⅵ. 取り組みを通して

今年度から導入した選択授業であるが，昨年度以前に比べ３～４名の小集団を編成して指導を行うことにより，24名一人ひとりの実態により応じた学習とすることができたと考える。また，自分の得意分野や興味・関心の強い分野を自らが選択し学習することができたことで，24名すべての生徒が意欲的に

学習することができた。

今後，この選択授業を生徒たちにとってより意味のあるものにしていくためには，第一に本人・保護者・指導者の三者により，生徒個々の課題を年度当初の早い時期に明確化すること，第二に，明確化した生徒の課題に応じて，適切な授業内容を設定していくこと，第三に，多様な観点から授業の選択をさせることの三点が考えられる。第一の点については，年度当初に個々の生徒に関わるすべての指導者による生徒の実態把握を綿密に行い，将来に向けての課題を共通認識としてもつこと，合わせて，家庭訪問・懇談時に，本人・保護者と設定した課題についてのつきあわせを行い，学校，家庭での役割分担を明確にしていくことで現実のものになると考える。第二の点については，生徒一人ひとりの課題を様々な角度からとらえ，幅広い分野からより多くの授業内容を創造することでより適切なものとなると考える，第三の点については，生徒の選択が，ただ単に楽しさや自分の興味・関心に基づいたものにとどまることなく，異なる観点（全く未知の内容にチャレンジしていく，不得手な分野を克服するなど）からもなされるような指導を行うことが必要であると考える。

次年度も，選択授業を含め，本人・保護者・指導者が一体となり，取り組みを充実させて，一人ひとりの生徒に応じた基礎・基本の定着を図りたい。

引用・参考文献

荒森　紀行・泉本　聖子・石津　充・奥野　正二.「障害児教育における基礎・基本の定着と個に応じた指導のあり方」. 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」. 第34集. 2001. pp.107～120